

2020年5月26日

社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ 全体会合
議事録

1. 実施概要

日時：2020年5月26日 17:30～19:30

場所：オンライン

参加者：約30名

2. 第1部：三位一体プランの進捗報告

- SIMIの会計年度は7月～翌6月となっており、7月から新年度が始まるが、現在、新しいビジョン策定中であり、7～8月は移行期としたい。これを含め、SIMIの大きな方向性を検討中のため、第1部で三位一体プランの枠組みと案を提示し、第2部では全体からご意見をいただく場としたい。
- 資料はウェブサイトにてパスワード付きで閲覧可能となっている。

(1) 全体経緯説明【資料1】（運営事務局今田、伊藤（枝））

- 3ヶ月前の2/26に前回の全体会合を開催し、三位一体の動きを概説した。
- この3ヶ月間で、「ビジョン策定」「ビジネスモデル検討」「法人化・ガバナンス」の3つを同時並行で検討している。4/7に運営グループ・運営事務局中心でリトリートを開催した。
- 大きなイベントの検討として、Social Impact Day（秋にオンライン開催に決定）やアワード（開催延期）について議論を行った。
- リトリートでは、「SIMIのステークホルダーとは誰か、提供できる価値とは何か」の議論を行い、粗い部分はあるがSIMIの提供価値を洗い出し、「SIMIとはどんな存在なのか」ということを浮かび上がらせることを行った。それに先立ち、ステークホルダー毎にニーズとSIMIへの期待を洗い出している。
- SIMIの活動としては、ステークホルダーとして、「事業者」「中間支援」「資金提供者」「評価者・研究者」などを想定しており、本日も色々と話し合い、また継続的にコメントをもらいつつ、議論を進めていきたい。
- 今後、三位一体の動きをこの後も定期的 to 実施し、ビジョンを固めつつ、ビジネスプランを策定し、法人化・ガバナンスを定めながら、次回の全体会合（7月中旬頃）にて再度議論をしていく。9月に法人化し、新しいネットワーク組織として動きだしたい。

(2) ビジョン策定案【資料2】（Beyond2020WGリーダー伏見）

- Beyond2020は、2017年に策定したビジョンを、5年目の節目に見直すことを担って

いるワーキンググループ（WG）である。2020年1月に発足し、6月末にビジョンの案を2-3提案することを目指して活動している。

- SIMIは150以上の団体が参加している。SIMI内外のヒアリングを通じて、SIMIに対してどのように感じているのか、社会的インパクトへの期待等を、SIMI外部17名、内部9名にヒアリングを行った。
- その結果を踏まえ、6月末までに、多様な人々が関わる公共財としてのSIMIのビジョン・ミッションを見出す予定である。「行政、多様な業界団体との連携を通じた開かれたプラットフォームの構築」「ソーシャル・セクターの現場とつながる強みを活かした事業者目線の社会的インパクト評価／マネジメントの推進」などを意識していきたい。SIMIならではの難しさもあるが、多角的な可能性があるため、それを踏まえて、ミッション・ビジョンを策定したい。

(3) ビジネスモデル検討案【資料3】（Social Value Japan 伊藤（健）、竹之下）

- ビジネスプランとして、ミッション・ビジョンにどのように到達するのか、どのような事業を展開することで目標を達成するのか、という事業の進め方を定めるために検討を行っている。3つのステップで進めており、現状を整理してシステムマップを描き、介入戦略を定めてストーリーラインを整え、それに基づくアクションを定めていく。どのステークホルダーに、どのように介入していくのか、どのような提供価値を提示するのか、という議論を深めていく。
- 1つ目のステップとして、システムマップを描き、様々なステークホルダーがどのように関連し合っているのか、誰のどの要素に働きかけるのかを見出していく。理想の状態に対して、現状を整理していく。
- そのために、各ステークホルダーが社会的インパクト・マネジメントを実行する上で必要な「要素」を洗い出す試みをしている。第2部のワークショップで議論したい。
- 介入戦略が見い出したら、本当にそのようなニーズがあるのか、システムマップのサイクルが回っていくのかを確認し、ストーリーラインを整理していく。

(4) ガバナンス【資料4】（運営事務局今田）

- これらのビジョンとビジネスプランを実施していく運営体制を整えるために、法人化を予定している。法人格やガバナンスは今後詰めていくが、決定する過程でも全体会合などで議論していきたい。

(5) 質疑応答

- なし

(6) 第1回社会的インパクト・マネジメント・アワード開催見送りについて（アワード

事務局リーダー高木)

- 度々全体会合にてアワードの開催に向けて進捗報告を行ってきた。先日発表したように、新型コロナウイルス拡大の影響を鑑み、見送りとした。時機を見て、開催したい。

3. 第2部：全体・グループワーク

(7) ビジョン策定案を受けての全体ワーク【資料5】（伏見）

- 公共財としての SIMI のミッション・ビジョンを策定していく上で、どういう認識や期待で SIMI に見ているのか、皆さんの声を聞きたい。Beyond のメンバーで挙げたキーワードを上げたので、「SIMI にはこれが重要、これが必要、自分はこれがあるから SIMI に参加している」等のキーワードを上げてコメントをしてもらいたい。
- (40 個ほどのキーワードを表示し、そこから各自 3 つくらいのキーワードを選んでもらい、チャットに投稿してもらった。そこから、各自の SIMI への期待や SIMI の位置づけを探っていく予定)

(8) ビジネスプラン：グループワークの説明【資料3】（竹之下）

- システムマップの楕円に書かれているのは、各ステークホルダーの「社会的インパクト・マネジメントを実行する上で必要なもの」が「要素」である。どういう要素があれば、社会的インパクト・マネジメントが実現できるか、を見出したい。
- ステークホルダー毎に分かれて、以下の3つを議論してほしい。
 - ①社会的インパクト・マネジメントを実践する目的は？必要な要素は？
 - ②理想の要素の状態は？現状の障壁は？
 - ③それぞれの関係者にどう影響を受けているか？また、与えているか？
- (各グループに分かれて議論を約 30 分)

●全体共有

【①資金提供者グループ】

- 資金提供者が、社会的インパクト・マネジメントを実践する目的と必要な要素は、共通言語（コミュニケーション）の確立と、他団体/活動との情報共有によって共通の認識が生まれ目線がそろうことである。
- そのためには、団体内理解の醸成が欠かせないが、上手く進んでいない印象がある。
- 団体毎に社会的インパクト・マネジメントに関して個別に対応する必要があり、測定手法や実施における位置づけ、実施に対する姿勢などに違いがある。
- 実施におけるコスト負担については誰が拠出するのかは議論になりやすい。

【②事業者グループ】

- 自団体が行っていることを外部へ伝えてファンドレイズにつなげていかなければ、団体やこの分野の活動がなくなってしまうという危機感が強い。企業や財団へ活動の意義を伝えるために、社会的インパクト・マネジメントという手法や客観性に期待している。アウトカムを意識していきたい。
- 経営者や一部のマネジメント層は必要性を認識し、社会的インパクト・マネジメントを進めているが、データ収集の負担のある現場では反発もある。経営層は、資金調達ではまだアウトプットレベルの情報で十分な印象はあるが、自組織の活動の価値を把握していくことが、将来的には必要だと認識で、トップダウンで進めている。資金提供者やパートナー（特に行政）が必要性を認識してくれれば、もっと効率的に良いデータが集まると感じるが、理解が乏しく、実施における障壁になっていると感じる。
- 投資家において、この2-3年アウトカムへの言及が見られるようになったが、まだアウトプットレベルの把握のみにとどまっている。

【③中間組織グループ】

- 自らの団体の価値を見直す機会が必要という認識はあり、セミナー等へ来ている人は反応が良い。受益者や顧客の整理はだいたいの団体は反応が良い。
- そこからマネジメントという段階に進むには団体全体の合意も必要で、経営改革にも関わるので難しい。短期的な資金需要や事業の提供を行いながら、マネジメントに変更を加えるのはきつい。
- 現場スタッフの機運が盛り上がりつつも、経営トップが理解を示さないと進まずモチベーションが落ちる。マネジメント自体は非常に大きな目標になるため、サブ目標があると成功体験になる。
- 社会的インパクト・マネジメントが必要かどうかは優先順位の問題で、団体に合った支援が求められる。支援メニューの一つとして内発的に取り組む意欲のある組織や VISION があるところに適切な支援をするのが妥当なのではないか。実施の意義が中間支援団体の中でも明確でない。手法の確立や実行体制の確保はかなり厳しい。中間支援団体として、知識が得られるネットワーキングの機会が必要。
- 中間支援団体と評価者の役割分担を行っていけると良い。

【④評価者・研究者グループ】

- 「事業者（社会課題の解決に取り組む主体）が社会的インパクト・マネジメントを実施するにあたって、支援者たる評価者がすべきことは何ですか？」という観点で検討する。
- 社会的インパクト・マネジメントは事業者の目的に沿って行うものであり、それを評価者は支援する。事業者は社会課題のカオスのなかにあつて、暗中模索の状況にある。TOC を一緒に考え、未来のあるべき姿と現実を橋渡ししていくとは役立つ。

- 評価が事業や取り組みに活かされ、評価が実践に役立つものになる。評価者には「社会的価値の見える化」という事業者のニーズを加速し、橋渡し役ができるのではないかと。間口を広く持つことで、小規模な団体にも届けたい。
- 社会に役立つエビデンス（広義～狭義）を構築していく。評価者は研究の立場で参加していることもある。
- 普段からインフォーマルな情報交換ができる場（Slack やチャットワーク等）があったほうが良いのではないかと。また、事例と評価事例の両方が共有されることで、「インパクト」が人により解釈が多様であるが、具体例を提示することで分かりやすい。事例が集まっているのが SIMI の良さ。評価の事例を蓄積する場所が必要で、SIMI に期待したい。データ収集は現場に負担がかかるので、定量データがとりやすくなる仕組みがほしい。レポートガイドラインを設けることで、評価の設計と報告内容の質の担保、透明性の担保ができるのではないかと。

●コメント

- （伊藤健）今まで検討してきたことの裏付けとなるような声を聞くことができ、また、こういった考えもあるよね、ということが共有された場だった。「こうなったらいいな」という像は描けそうなイメージは掴めたが、そこに行きつくための活動としては、すぐに効果が出るものだけではない、ということに改めて感じた。
- （竹之下）想定していた以外の情報が多く出たことで、要素が充実したことが良かった。社会的インパクト・マネジメントの必要性をみんなが感じているけれど、ではどうしていくのが良いのか、イメージが浮かび上がってくるような、良いインプットになった。

(9) クロージング

- 今後、SIMI の本日の議論を本日まで参加いただけていないメンバーにも公開し、各所からコメントを募っていく。
- 全体会で運営メンバー・賛同メンバーの皆さまから出たコメントが、最終的にどのように反映されたのかを全体会で報告する。できるだけ透明性を保って進めていくことで、新生 SIMI が立ち上がることにつなげていきたい。

以上